京都御所の誕生

平安時代に京都に都が遷されたとき、御所は現在よりも 2 キロ西に位置していました。その後、火事によって御所は何度も移動を余儀なくされ、貴族の住居も移転を繰り返しました。現在の京都御所がある場所に初めて住んだ天皇は光厳天皇で、1331 年に東洞院土御門を仮住まいとしました。1392 年の南北朝統一後はここが正式な御所となります。

中世以来、源頼朝などの強力な権力者たちが頻繁に御所の改築を行ってきました。桃山時代、豊臣秀吉は御所のすぐ近くに、皇族やその他の貴族の住居を集結させた地区を作ることを計画します。この流れは江戸時代にも引き継がれました。計画は 1600 年代の初めにはほぼ完成し、その後は、拡張はしても、基本的な構造に大きな変化はありませんでした。

里内裏(さとだいり)の変遷(へんせん)

～ 994 年 藤原道長(ふじわらみちなが)の内覧以前

995 ～ 1027 年道長の死亡(しぼう)まで

1028 ～ 1074 年藤原頼通(よりみち)の死亡まで

1075 ～ 1101 年藤原師実(もろざね)の死亡まで

1102 ～ 1162 年藤原忠実(ただざね)の死亡まで

江戸(えど)時代前期の内裏(だいり)

江戸(えど)時代中期の内裏(だいり)

江戸(えど)時代後期の内裏(だいり)

京都御苑(ぎょえん)の範囲(はんい)

ごしょ
御所

みやけ
宮家

やしき
公家屋敷

江戸時代における内裏の移り変わり

江戸時代初期、この地域には町屋（庶民の家々）がありましたが、しかし次第に公家の邸宅がそれらにとってかわり、江戸時代後期には 140 以上の公家屋敷が立ち並ぶようになりました。

御所や宮家の位置も少しずつ変わりました。

３つの江戸期の京都御苑の古地図が、内裏と公家町の変遷を示しています。

京都御苑（黄緑）は旧平安京の北東の端にあります。マップ内の、他の色が塗られているエリアは時代によって異なる里内裏の位置を示しています。